哲學研究　第五十五號　第五卷第十冊

社會科學の性質に關するコーンの見解に就て

藤井健治郎

一

一方には記述科學、說明科學、歸納科學があり、他方には規範科學、評價科學、有極科學、演繹科學がある。此等兩種の科學の關係について、コーンはこは其發達の徑路に於ける階段に過きぬ。從て某々の科學は記述科學、說明科學でなければならず、之に反して某々の科學は規範科學、評價科學でなければならぬなどといふことがないと主張してゐる。

Georg Cohln, Ethik und Soziytogie, Kopenhagen, 1916

コーンは科學は發達するに從て、其取扱ふ問題も、又其取扱ふ仕方も段々變化するものである。自然科學でも、人事科學でも或る時代には記述科學、說明科學であり、そ

れが他の時代には規範科學、評價科學となり、又その反對に或る時代に規範科學、評價科學であつたものが、次の時代には記述科學、說明科學となるのである。是はすべて音律的(リトミツシユ)に變化するものである。特に倫理學についていへば、倫理學は、記述科學、說明科學か、又は規範科學、評價科學か、孰れか其一方でなければならぬなどといふ道理はない、其發達の如何によつて、前者であつても可し、又後者であつても妨けない。それ故にコーンはヴントが倫理學は規範科學である、永久的に規範科學であらねばならぬとした見解に反對してゐるし、(同書二五六——二五七頁)又レヴィブルュールやヘフディング等が、凡そ科學は皆實用的(プラクチツシユ)であるが、それが進步するに從て、具象的な主觀の色彩が淡くなつて、段々抽象的な、論理的な、客觀の色合に變つてしまうものである。故に倫理學も、進步しない過去の倫理學は實用的なもの、規範的なもの、評價的なものであつたが、將來の倫理學は其實用的といふことを離れて、純然たる記述的、說明的の科學にならねばならぬ。而して斯くて得た處の性質は、科學としての倫理學の當さに居るべき性質なるが故に、永久に此性質を失はしめてはならぬといふ意見に對しても反對の見解を表示してゐる。(同書二六四頁其他處々)。但コーンも將來の倫理學は社會科學の一として記述科學、說明科學であらねばならぬといふことを認容して、其

點に就ては必ずしもレヴィ・ブルュールの見解に反對してゐるのでない。唯レヴィ・ブルュール等はそれが倫理學の當さにあるべき性質で、今後永遠に渝るべからざるもののやうに考へてゐるのに對して、コーンは必ずしも今後永遠といはず、又規範科學、評價科學に變ることあるかも知れず、又變つても論理上敢て不都合はないのであるが、兎に角今日の倫理學、否一般社會科學の進歩は、彼等をして記述科學、説明科學ならしめる程度に達してゐるといふことをいふに過ぎないのである。

二

レヴィブルュールのやうな考方は(Ethics and moral Science, Engl. Transl. 1905)はベーコンが新論理學を提唱した時から、特にコントが實證哲學を主張した時からあつた考で、レヴィブルュールの倫理學の性質に關する考察は、コントの思想を敷演したものであるといへるし、又現在では氏と巴里大學の同僚であつたデュルケームなども倡説してゐる説である。(E. Durkheim, Les Règles de la Méthode Sociologique, Paris, 1901)。然るにコーンは其説にも反對し、又説明科學、規範科學の永久的區別の見解にも反對して、更に新しい立場を考出した處が、彼の創見であつて、それがコペンハーゲン大學の金牌賞を得

た所以であらうか。

さて說明的と規範的と、科學の進步につれて音律的に交代するものとして、其交代するのには、何等かそれをして交代せしめる所の契機がなければならぬ筈である。其契機は何であるか。コーンはそれを經濟學上でいふ最大効果說(意譯)(Maximums problem)で說明してゐる。人類の經濟生活は生產方法と生產との間に生ずる最大効果が基準となつて、其變化、發達を進めて行てゐるものである。卽ち經濟生活の發達とは、生產作業と其成果との關係が、時間的に、空間的に、段々間接的になり、緣遠くなるといふことである。漁獵時代の經濟生活は、漁獵作業其者が直ちに其成果を擧げ、而して直ちに衣食の需用を滿たすが故に、作業と成果との關係は甚た直接なるものである。農業時代になると、播種と收獲との間に、種々複雜した作業が挿入されねばならず、又必ず多少の日月の經過が含蓄されねばならぬから、生產方法と生產との關係は餘程間接的な、而して緣遠いものとなる。經濟生活が更に進步し、更に複雜になれば、兩者の關係は愈間接的となる。しかし生產方法と生產との關係が如何に間接的になるとはいへ、無限にそれが延長されることはない。例へば銀行への預金は、當座よりも定期、又同じ定期でも年數が長ければ長い程、利率が段々高くなつて預金者に利

益である。併預金者はたとひ預け期間を長くすればする程利益であらうといふことを知つたにした處が、百年、二百年といふやうな、自分の一代中には到底引出すことが出來ないやうな長い期間で預金するものは甚た稀であつて、大概自分の引出さうと思ふ年限と其費途とを考へて、其間に於て最大の効果を擧け得るやうにして預金するものである。即ち生産方法と生産とは、考へ能ふ最大の効果で結合し得る限り、時間的に隔てられるものであつて、其最大効果の限度を超えてまでも隔てられるものでない。かういふのが經濟學上の最大効果說といふのである。

コーンはそれと同樣な考察を記述科學、說明科學と、規範科學、評價科學との音律的交代に加へて、その交代は科學と利益(Interesse)との間に於ける最大効果の契機に依て決定されるものであるといつてゐる。すぐ目前に効果を擧けるやうな科學は、其性質最實用的で、規範的で、評價的で、あつて、其場合に於ては科學と利益との結合が頗る近接的になつてゐるが、しかし其利益は極めて狹小の範圍に局限されてゐるものである。然るに科學が進步するに從て、科學と利益との距離は段々遠くなるが、しかし其代りに其利益の霑均する範圍は益々廣く且大となる。科學の爲の科學とか、眞理の爲の眞理とかいふのは、斯くて段々利益から遠距離に隔てられた時代の科學の性

質を意味した處のものである。然し科學は無限に利益から遠けられ、離されることが出來ぬ。たとひ其距離は如何に遼遠なものであつても、科學は究竟は、利益と結合しなければならぬ。此意味に於てコーンは經濟的認識論、實用主義マッハ、アヴェナーリウス等の認識論を是認してゐる。唯此等の認識論の弱點は、科學の發達の各階段が――詳しくいへば科學を組織する各斷定がすべて實用的で、有効的であらねばならぬとする點に存する。科學と利益との關係は、其等の認識論が考へるやうにしかく簡單なものではない。具象的な、而して人間的な利益は、科學から之を除去することが出來る。若し假りに科學と利益との關係が其等の認識論が考へるやうに簡單なものならば、一度記述的な歸納的な『正しい』道に就た科學が、再び演繹的な、規範的な取扱方に復るといふことが、如何にしても理解されることが出來ない。こんな風にコーンは演繹科學と、歸納科學、說明科學と規範科學、記述科學と評價科科學との音律的交代の契機を說明してゐる。

コーンは自己のかうした說を確めんが爲に、占星術から天文學、煉金術から化學の發達して來たことや、又文法學、法學等の發達を例證として論述してゐる。(同書第三編第二章二五六頁――二八二頁。其中でも特に第八節から第十三節に至る)。

三

是がコーンの最大効果說の要領であるが、之を科學と利益との關係に應用して、說明科學と規範科學との交代を說明したのも、彼の創意の存する處である。

コーンのかうした思想は、彼の『倫理學と社會學』といふ書中に組織したる體系中に於て、如何なる位置を占めてゐるかといふに、從來の規範科學としての倫理學の間にも、又同樣に從來の社會學の間にも、幾多の難點があつて、從て倫理學と社會學との關係が分明になつてゐない。然るに此等の難點は結局する所科學と利益、個人と多數、及責任といふ三の問題に括約されてしまうもので、此三の問題を解釋すれば、自然從來の倫理學と社會學とに含蓄されてゐる難點を解き、かねて兩學の關係を明にすることが出來る。コーンはかやうに考へて、記述的社會學、及記述的倫理學の可能を豫想し、而して兩學は相依の關係にあることを論斷したのである。かうしたのが、同書の結構であるが(同書第一編、第二編及第三編第一章第一、二節等)、從て科學と利益といふ問題は、彼の記述的社會學、記述的倫理學の可能、並に兩學の關係を決定する三關鍵中の一である。彼は斯くの如く記述的の社會學と倫理學とを主張してゐるが故に、

科學と利益との關係問題についての論述が、記述科學、規範科學との關係、卽ち彼の見解に從へば兩者の音律的交代を提唱するやうになつたのは、彼の此書中に示したる思想の運ひ方からして、寔に當然の成行と謂はざるを得ない。

コーンのかゝる思想に對しては、種々の疑問が提出される。例へは兩學の律的交代を決定さる所の最大効果といふは、如何にして之を決定することが出來るであらうか。經濟的生活と認識生活との發達を、全く並行的に說明することが出來るものであるかどうか、又探究心、若しくは驚異に對する究明心は、利用といふもの以外、科學の動機として閑却し得る程些少なものであるか、又其心は必ず利用を欲するの心から派生せしめられ得るものなるか、是等幾多の問題が提供される。しかし是等は比較的枝葉の問題で、其解釋の如何は勿論全體の思想體系の上に多少の變化を及ぼすには相違ないが、しかしコーンの眼目としてゐる記述、規範兩科學の音律的交代並に其交代を決定する所の最大効果の思想は、それが爲に顚覆せしめられるやうなことはない。

廣くいへば一般に社會科學、特には倫理學についていへば吾人の疑問とする所は、記述科學と規範科學との關係如何といふのではない。兩者の關係如何をいふ時に

は、既に兩種科學の成立を豫想しての上のことであるが、吾人の疑問とする所は規範科學といふ科學が論理上果して成立し得るか、成立し得るとせば如何にして成立するか、むしろかうした點に存するのである。若し兩種科學は成立し得るものとして、而かもそれはヴントの論じてゐるやうに、單に吾人の考察の仕方に過きないものとすれば(Wundt, Ethik, Einleitung)、倫理學は記述學であつても可し、規範科學であつても可い譯であつて、必ずしも其孰れかでなければならぬといふ筈はない。其點に就てはコーンが、倫理學を記述科學と見るか、規範科學と見るかは、それは實用上(プラクチッシェ)の問題(フラーゲ)であつて、科學に對する利益の如何によつて決定(きめ)る問題である(同書二五七——二五八頁)といつてゐるのは正當である。しかし是は記述、規範兩種科學の成立を認容しての上のことであつて、規範科學なるものが、科學として如何にして成立するか疑問となつてゐるものには、コーンの此說明はまだ要點に觸れてゐないのである。

私を以て之を觀れば、記述、規範の兩種科學は、コーンの說いたやうに音律的に交代するものなるか、將たコントやレヴィ・ブルュールなどの論じたやうに、科學の發達の幼稚な時には規範的で、成熟した時には記述的、說明的になるものであるか、それ等はむしろ第二次的の問題であつて、第一次的の問題は、此等の兩種科學は果して成立するか、

成立するとせば、其論理的性質は如何なるものであるかといふことに存する。此問題の解釋につきては獨コーンばかりでない、從來此問題を論じた多くの學者も同樣であるが、一種の謬見を有つてゐるやうに見ゆる。其謬見といふのは、說明といふ語の解釋についてである。普通に說明といふのは、或る事實又は現象の中に存する因果の關係を明にすることであるとか、又は具象的な事實を抽象的な法則又は原理に還元することであるとかいふやうに解せられてゐる。若し說明といふことがさうした性質のものであるならば、說明科學とは因果法で組織された認識體系であるといふことになる。しかし此「說明」の說明は不備であつて、說明には因果の關係を明かにするといふことの以外に、猶目的と手段との連鎖を闡明するといふこともある。卑近なる一例で之を說明すれば、爰に手を動かして机上のペンを執つたといふ事實があるとする。其事實について筋肉の運動の因果關係等を明にするも一種の說明であり、又そは字を書かんが爲めであるといふのも、更に他の一種の說明である。前者の說明でも一の認識系統が出來て、吾人の論理心は滿足し、後者の說明でも亦一種の認識體系が出來て、吾人の論理心は滿足する。かやうに說明には二種類が可能である。さてかやうに二種類あるとして、前者は因果の說明であるが故に之を因果的說

明と名づけ、後者は目的と手段の説明であるが故に、之を有極的説明（テレオロギッシェ）といふことが出來る。

若し説明といふことを因果の關係を明かにすることであるとしたならば、以上の事柄は猶之を次の如く説明することが出來る。曰く、因果性（カウザリテート）に二種類ある。一は自然的因果性（ナツユーラルカウザリテート）であつて、他は有極的因果性（テレオロギッシエカウザリテート）である。説明とは右二種の中孰れかの因果性を明にすることである。かやうに解釋することが出來る。更に換言すれば自然的因果性は知力の論理の形式であつて、有極的因果性は意思の論理の形式であるといふことが出來る。

かやうに因果性に二種あるが、是等は皆吾人の經驗統一の原理となることが出來る。かくて統一されたる經驗は所謂科學といふものである。故に科學は事柄によつて其統一原理を異にすることがあるも、しかし其説明科學たるに於ては、いづれの原理で統一されてゐた處で、何等異はない筈である。然るにコーンを始めヴント其他の多くの學者は自然的因果性に依る説明を與へる科學をば、之を説明科學と稱し、之に反して有極的因果性に依る説明を與へるそれをば、之を規範科學と名づけて、兩者異つたものゝやうに説くのである。是れ私が彼等の考察を謬れりと説く所以で

ある。

セッスは道德のナチュラル・ヒスツリーの研究は自然科學であり、說明科學であるが、道德の原理の研究は規範科學でなければならぬと說いてゐるが、謂ふ所の道德のナチュラル、ヒスツリーとは如何なものであらうか。エスターマルクや、ホッブハウスなどの研究は定めしそうしたものであらう。しかし彼等の說明はすべて有極的因果性による所の說明である。それが自然科學であり、說明科學であるなら、原理の研究は、何故說明科學たり得ぬであらうか。

私はかやうに考へてるので、コーンの最大効果に依る所の音律的交代の說は、極めて器用なものであるが、實は甚しく妥協的な、――學問上では許し難い妥協的なものと思ふ。（了）